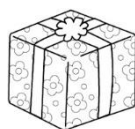




# 3学年だより



令和5年12月22日(金)  
西東京市立柳沢中学校  
第3学年 No.30

## 12月は「人権月間」です！

学校だよりでも紹介されましたが、1948年12月10日、第3回国際連合総会で「すべての人間は生まれながらにして自由でありかつ尊敬と権利について平等である。人間は理性と良心を授けられており、互いに同胞（同じ母から生まれた兄弟・姉妹）の精神をもって行動しなければならない。」と、人間の自由、尊厳、権利、平等を掲げた「世界人権宣言」が採択されました。そしてこれを記念して国連では12月10日を「世界人権デー」と定めています。わが国では、1949年から12月10日最後とする1週間を人権週間として人権について考える日々と様ざま残間な取り組みを各地で行っています。

数年前の人権週間のポスターでは「考えよう相手の気持ち。育てよう思いやりの心。」とありました。私たちにとっては耳慣れた言葉が、あえてポスターに使われているのは、ことばは身近なものだが、実践は、なかなか容易ではないというあらわれではないかと思えます。しかし、容易ではなくても、なんとしてでも実践にたどりつきたい二つの言葉であると思えます。

また、今年の人権週間のポスターでは「誰か」のことじゃない。と書かれていました。いじめや虐待、子どもの人権問題、障害のある人や外国人、性的マイノリティ等に対する偏見や差別など多様な人権問題が依然として存在しています。自分以外の「誰か」のことではなく、自分のこととして捉え、互いの人権を尊重し合うことの大切さについて、認識を深めることが大切ですね。

今一度自分の行動や考え方を振り返ってみましょう。

### 「伝えたいことがある」

12月11日は、道徳の時間に「差別や偏見について考える」というテーマで行いました。

「差別や偏見のない社会を築いていくために何が必要か？」という問いに対してこんな回答がありました。

○生徒の考えより

相手の立場に立って自分のこととして捉えてみる必要がある。そして、どんな人でも大切な人間としてみることがこれからの世の中では大切になってくる。

相手を知ろうとすること。不可能だとあきらめずに差別や偏見と闘い続ける強い意志が自分の未来を変えていけると思う。人間は心持ち次第で変わることができるし、訴え続ければ賛同してくれる人や協力してくれる人は出てくると思う。

自分の国の文化や他国の文化をお互いに理解し、多様性を尊重することが必要だと思った。

祝

「税の作文」

A組 O Mさん

「税の標語」

A組 O Tさん

C組 A Mさん

## 自分らしい選択 ○ M (感想文コンクール応募作品)

私は冒険家に憧れる。冒険家は困難な状況に遭遇しながらも進むべきか、しばらくとどまるべきか、違う道を探すべきか、断念すべきかと悩みながらもまだ見ぬ景色を求めて道なき道を進んでいく。私は「手のひらの楽園」を読んで、主人公友麻のように葛藤しながらも穏やかで冷静に状況を判断できる強い心を持って、自分の決めた人生を歩んでいく人間になりたいと考えるようになった。

長崎県の離島・松乃島で母子家庭に育った主人公の友麻が母の反対する気持ちを押し切って本土にある私立高校のエステ科に進学するために島を離れた。その数日後、母は失踪してしまった。その時の友麻は失踪をなんとなく察していたところもあって、落ち着いて平然と寮生活を送っていた。私だったら慌ててしまって友麻のように落ち着いていられないと思う。友麻は能天気で天然なところもあるけれど、いつも前向きでむやみに怒ったりせず冷静な心の強さを持っている。それに比べると私は時々目先のことにとらわれて冷静ではいられなくなってしまう。相手を傷つけてしまった時、自分が間違っていることに気づいたときなどに勇気を出して謝ることができないことがある。友麻は、傷つけたと思った時には素直に謝ることができ、友達との関係が深まっているように思う。私も間違っていた時には、悩んでばかりいないで素直に謝ることができる友麻のようにになりたいと思う。そうすればもっと友達との関係が深まると思うからだ。

寮生活を送っている友麻は長期休みに帰省することになる。しかし母が失踪中のため叔母の家に滞在することになった。滞在中、叔母に施術をしてあげたらとっても喜んでくれた。この他にもルームメイトに、老人ホームで、文化祭で施術をしてあげた時にも、友麻の施術はとっても喜んでもらった。母親に施術できなかったことは残念だったと思うが、身に着けたことが誰かに喜んでもらった経験は友麻にとって大きかったと思う。そしていつか母親に施術してあげたいと思ったに違いない。

私は今受験生だ。私の祖母は偏差値が高く、有名な学校を私に望んでいると話していた。私は、自分の学力レベルに合っていて背伸びをしなくても勉強についていけ、好きなことができる学校に行きたいと思っている。しかし、祖母の喜ぶ顔が見たいと思う気持ちがあることも確かだ。自分のレベルにあっていること、勉強以外にも好きなことをする時間がある学校という選択は偏差値が高いこと、有名であることに比べたら劣ることだろうか？友麻は、偏差値や有名さで選ぶのではなく自分のやりたいことができる学校に行った。離島から遠く離れているにも関わらず、そこを選んだ。私も友麻のように自分のやりたいことができる学校がもし家から遠かったとしても、また家族の希望とは違っていても、入学したいと思う。そして良かったと思えるようにしたい。

友麻は働き詰めの母に施術をしてあげたかったため高校選択でエステ科がある学校に進学したが、それは自分だけで勝手に決めてしまっていて母には相談していなかった。母が友麻に対して、島から通える高校があったのになぜ本土に行ってしまったのかと聞いた時、友麻は島から通える高校は普通科だけで、それだと卒業後は専門学校に行かないといけなくて、それにそんな高い学費は払えないでしょうと反論した。その時の母は友麻の一方的な報告を聞いてうなずいただけだったが、それでも友麻は振り切って進学した。

私も小学校6年の時に入学を迷っていた中学校は、近所にある中学校と家から少し離れた中学校だった。その頃遠い方の学校に通っている知り合いから、だいぶ小規模だということやとてもいい学校だということを知っていた。同じ小学校にいた私の友達に中でそこに通学を希望する人はいなかったが、学校説明会を聞いて強く行きたいと思った。しかし、休み時間はひとりで過ごすことも多く、すぐにはクラスに馴染めなかった。

あれから2年半がたち卒業まであと半年、たった一人でここに来たが、自分の選択は正しかったと思う。先生との距離が近い。また、いち早くコロナ前までのように行事を行うことができるようになってきていて、それらを通して友達との距離が近くなり、絆も深まっていると感じる。よかったと思うことは挙げればきりが無い。初めは不安だったけれど、あの時の決断は間違っていなかったとはっきり言える。

友麻が高校を卒業した後のことは本には書かれていないが、私は多くの人を友麻の手のひらで癒せるエステシャンになっていくと思う。私はこれからもたくさん悩むと思うが、そんな時はこの本を読み返して、最終的には自分で自分の道を決めて友麻のように力強く人生を歩んでいきたい。